2009年7月26日　主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一6章1～12節
説教題：かたくなな心を砕くために

1　七ヶ月の間に起きたこと

続けてサムエル記を見て参ります。イスラエルとペリシテ人の間に、領土のことを巡って争いが起きました。この戦いでイスラエルは二度の敗北を喫します。イスラエルの人々が大切に考えていた神の契約の箱が奪われてしまいます。

ペリシテ人はダゴンという神を拝んでおりました。畑の農作物の豊穣を願ってまつられた神であろうと言われています。契約の箱をダゴン神社に安置しました。別の神社を造ってそこに置いたのではない。イスラエルの神もダゴンの神も彼らにしてみれば、いろいろある神々の一つに過ぎないのです。深く考えもせずにぽんと起きました。

ところが、翌朝起きてみると、ダゴン神の像がバラバラになって倒れているのが見つかる。それだけではない。疫病が大発生しました。これは大変だと言うことで、契約の箱を別の町に移す。そうするとそこでも同じように疫病が発生する。たちまち町中がパニックになります。こうなると契約の箱は、まるで疫病神の扱いです。契約の箱をおまえのところに置け、いやそっちの方だとお互いに押しつけ合ってけんかになるという騒ぎにまで発展しました。

6章1節に「中の箱は七ヶ月もペリシテ人の野にあった」とあります。最初はダゴン神社に恭しく置かれていましたが、今や、野ざらしです。みんな恐くて近づくことができない。とうとう、山の中に捨ててきたというような状態だったと思います。

最初は、時間が経てばこの病気も徐々におさまっていくのではないかと楽観していました。ところが、いつまで経ってもおさまる気配がない。深刻な事態であることに気がつきます。これは何とかしなければならないということで、五つの町のリーダーたちが集まって会議を開き、対策を練ることになりました。

2　出エジプトのことを思い出す

（1）償いをしなければならない

その対策会議の場に祭司と占い師を呼ばれ、アドバイスを仰ぎます。彼らは言います。3節。「イスラエルの神の箱を送り返すのなら、何もつけないで送り返してはなりません。彼に対して償いをしなければなりません。」

どんな償いをすればいいのかと尋ねると、こう答えました。「五つの金の腫物、すなわち五つの金のねずみを作って契約の箱といっしょに送り返しなさい。」

五つの町が同じ病気に見舞われて苦しんだので、それにちなんで五つだと言います。それはよいとして、なぜねずみの像なのか。そういう疑問が湧きます。研究者の間でもいろいろ意見が分かれているようです。病気によってできた腫物の形がねずみの形に似ているから、だからねずみの像だということのようです。

いずれにしても、ペリシテ人はこの苦しみから逃れるためには、償いをしなければなら

ないと考えています。償いというのは、何か禁止されていること、やってはならないことをしてしまったときに、許してもらうために支払わなければならない代金であったり、品物であったり、そういうものを指します。

私たちは日々の生活の中でこのことを経験しています。ほかの人から借りて読んでいた本を無くしてしまった。そうしたら、同じ本を新しく買って返すか、本が手に入らなければ、お金で支払うか、それともお菓子を持っていって、許してもらうか、そういうことをします。それが償いです。

ペリシテ人は金のねずみの像を作って、償わなければならないと考えます。ねずみの像がふさわしいものであったのかどうかは大いに疑問がありますが、しかし、金（きん）という高価なものを支払わなければ許されないということは考えています。

（2）なぜ、心をかたくなにするのか

祭司と占い師は、彼らなりの根拠を考えています。6 節にこうあります。「なぜ、あなたがたは、エジプト人とパロが心をかたくなにしたように、心をかたくなにするのですか。神が彼らをひどい目に会わせたときに、彼らは、イスラエルを自由にして、彼らを去らせたではありませんか。」

皆さんも、イスラエルの人々がモーセを先頭にしてエジプトの地から脱出していった出来事のことを知っていると思います。聖書の出エジプト記にそのことが詳しく書かれています。エジプトに住んでいたイスラエル人たちが差別を受け、大きな苦しみの中であえいでいたときに、神はモーセをエジプトの地に遣わします。モーセはエジプトの王であったパロと何度も交渉し、イスラエル人を去らせて欲しいと願います。ところがパロは許そうとしない。それで神はエジプトに十の災いを下します。そしてとうとう十番目の災いがくだったときに、パロは言わざるを得なくなる。イスラエルは早く出ていけ。

ペリシテ人は、今自分たちが受けてい災いと、エジプトでの出来事とを結びつけています。パロはイスラエルの人たちを結局返すことになったではないか。あなたがたも同じだ。あのパロのように心をかたくなにしてはならない。契約の箱に償いの品物をつけて送り返さなければならない。ペリシテ人は出エジプトのことふり返りながら、今為すべき事を考えようとしています。

これはよく考えますと、実に不思議な光景です。ペリシテ人にとって、エジプト脱出の出来事は、あくまでも外国のお話しです。自分たちが戦った敵の側の歴史です。自分たちが直接に経験したことではありません。この時代からさかのぼること四百年も前の出来事です。

出エジプトの出来事が、どれだけ大きな影響を周りの人々にも与えていたのかと改めて考えさせられます。

（3）契約の箱が二頭の雌牛に引かれていく

祭司と占い師のアドバイスに従って、ペリシテ人は新しい車を仕立て、それに契約の箱を載せ、それから金の像を袋に収めて、かたわらに置きました。その車を二頭の雌牛が引いていきます。どういう訳か、この雌牛はまだ乳を飲ませている雌牛でなければなりませんでした。子牛は母親から引き離され、小屋につながれました。雌牛二頭は鳴きながら進んでいきます。ペリシテ人たちは、この車の行く末を確かめようと後をついていきま

した。もし、ベテ・シェメシュの町に行くなら、このわざわいはあの契約の箱によるものだと言われていました。

どうして母親の牛と子牛を引き離してしまうのでしょう。母親の耳にも講師の鳴き声は聞こえています。当然母牛は子牛の方へと走っていくはずです。ところが普通でないことが起きました。車は、右にも左にもそれずに、ベテ・シェメシュという国境にある町に引かれていきました。ペリシテ人は、この災いは偶然ではない。まさにあの契約の箱によるもであったと知らされていきました。

今、神の契約の箱はイスラエルに無事に戻っていきます。

3　救いの原則

（1）かたくなな心を砕く

これでめでたし、めでたし。物語はここで終わりのはずです。でも、聖書全体は、神の救いのご計画を示すために書かれたのだと言われます。そうしますと、この箇所もハッピーエンドでよかったねと言うことではない。神の救いの原則を私たちに教えるために書かれていることになります。ここは、救いの原則に関して三つのことを教えています。

事の発端は、ペリシテ人が契約の箱をイスラエルから奪って来たことから始まりました。この契約の箱を持っていれば、良いことがあるに違いない。ひとことで言えば、神というものを自分の都合に合わせて利用してやろう。そういう動機が最初にありました。

これは人ごとではありません。私たちは、信じる前はどんなことをしていましたか。普段は寝坊してゆっくり休んでいる人たちが、お正月になると、大混雑をものともせずに神社に初詣に行く。お賽銭を投げ入れて、新しい一年の無事をお願いしてくる。そういうことを当たり前のようにしていました。自分だけではない。家族の無事を祈る。友人や知人の幸いを願う。その願いはもちろん尊いものではあるでしょう。でも、私たちの願いを叶えてくれるというすばらしい神というのならば、なぜ一年にいっぺん正月にしか思い出さないのか。大切な神であるなら、当然それにふさわしい扱いをすべきではないですか。多くの方は、でもそこまでしようとはしない。神と呼ばれるものを自分の都合の良いように利用しようとしていると言われても反論できません。

ペリシテ人は、契約の箱を手に入れました。神として敬うのではなく、神を利用としました。あの会議に呼ばれた、祭司と占い師たちは、問題の根源がどこにあるのか、かつてのエジプトでの出来事に照らし合わせることで的確に指摘しました。「あなたがたは心をかたくなにしているのだ。だからあなた方の上にわざわいが降りかかってきているのだ。」

愛の神である方が、災いをもたらして人を苦しめる。たとえ敵のペリシテ人であっても、それはあまりにひどい仕打ちではないか。そんなふうにとまどう方もおられると思います。私たちは「神は愛の方である」と聞き、すぐに連想します。愛のお方は、絶対に悪いことなどしない。病気とか災難というものを与えるお方ではない。どんなことがあっても、私たちを優しく抱きしめ、赦してくださるお方に違いない。

この考えは、半分合っています。でも半分は間違っています。神は私たちをとことん愛してくださっているがゆえに、私たちが間違ったことをすれば、とことんそのことを知

らせようとする方です。そこには、決して妥協はありません。ときには、災いさえも与えて知らせようとする。そう言われてびっくりなさるでしょうか。神が厳しいのではありません。人間の側が、それだけかたくなだということです。そこまで追いかまれないと人間は気がつかない。エジプトのパロのように鈍感だということです。

ここに救いの原則の一つ目があります。神は私たちのかたくなな心を砕こうとされます。極端な言い方をすれば、あらゆる手段を使ってそうなされます。私たちを愛するがゆえに、そうなさいます。かたくなな心のままでは絶対に神にお会いすることができないからです。

（2）償う

救いの原則の二つめを見ていきます。

ペリシテ人は、祭司たちの言葉を聞いて初めて自分たちの心がかたくなであった、神を利用しようとしていた罪人であったこと気がつきます。その罪が赦されるためには償いが必要であることを教えられました。そこで、金のねずみの像を五つ作って送り返すことにしました。ねずみの像というところに、ペリシテ人の信仰の曖昧さがあることは確かです。しかし、聖書は特にそのことをとがめ立てしていません。大事なことは、どんな形であったとしても、彼らが自分の罪に気がつき、償いをしなければならないと感じ、彼らなりの精一杯の努力をしたという点です。

神は、どんな形であれ、悔いる者の心をおろそかにするお方ではないのです。私たちの目から見たら、それは異教的であるとか、それはちょっと間違っていると思うこともあるかもしれない。しかし、神は目に見えることではなく、目に見えない私たちの心をご覧になり、大切にして下さる。そのことを知っていただきたいと思います。

（3）神が犠牲を払う

救いの原則の三つ目を見ます。

ペリシテ人は、車を新しく作り、契約の箱と金の像をそれに乗せました。この車を引いていったのは、二頭の雌牛です。子牛は牛小屋に戻しなさいと指示がありました。どうしてこんなことをわざわざしたのかと考えさせられます。やっぱりペリシテ人たちの信仰の曖昧さからだったのか。そうかもしれません。

そうであったとしても、このところに、神の御旨が示されていることは確かなのです。というのはありえないことが起きているからです。たとえ動物であっても、母親と子どもが引き離されていくことは悲しい出来事です。母親は泣きながら歩き続けました。子どもも母親から引き離され、悲しみに泣き続けました。動物虐待と言いたくなるかもしれません。

でも神は、親と子が引き離されていく悲しみの深さを知っておられます。それでもあえてこのことをなさっています。それはひとえに、悔いた心、砕かれた心を差し出していったペリシテ人を救うためです。この後、この二頭の雌牛は殺されて、全焼のいけにえとして神にささげられていきます。

神は、動物のことを何とも思っていないと言うことではありません。動物よりもまず人間のいのちの救いを大切にしようとしてます。

人が救われるために、神が何も犠牲を払わないというのではありません。二頭の雌牛が

子牛と引き離されて右にも左にもそれずにまっすぐに進んでいったこと、そして殺される事。これは、やがて神がなさろうとしていることをそのまま現しているのではないですか。イエス・キリストは右にも左にもそれずに、十字架に向けてまっすぐに進んで行かれました。父なる神から引き離され、捨てられていくという悲しみを経験されました。十字架において、血を流され、私たちの罪と償うために、犠牲を払って下さいまいした。

神が私たちを救うために、犠牲を払ってくださる。これが救いの三つ目の原則となります。

私たちの上にある日突然、災いと思えるようなことがふりかかることがあるかもしれません。頭が混乱して、私は何と不幸な人生なのだろうと嘆くかもしれない。このわざわいの責任は、あの人のせいだと思い込むかもしれない。

しかし、私たちは教えられます。どんな災いにも神の深いご計画と意味があるのだということです。私たちのかたくなな心を砕くために、神が私たちを愛するがゆえに与えてくださった試練なのかもしれない。私たちが十字架のイエスに出会うために、備えられた神のご配慮なのかもしれない。

主御自身が、まず私たちのために大きな犠牲を払ってくださっていることを覚えたいと思います。